

八重山諸島の考古学

8. 中森期の概要

中森期は、先の新里村期に比べて、圧倒的な人口増加がありました。それは、遺跡数・規模からもわかります。新里村期が、古琉球時代の八重山の形成、発展の時期だとすれば、中森期は、その完成とも言えるでしょう。

対外的な交流（交易活動）が増えた時期でもあり、この時期の各遺跡からは、多くの輸入陶磁器が出土します。また、屋敷囲いの石垣が登場するのもこの時期です。

(1) 遺物

1) 土器

八重山諸島の歴（原）史時代の研究は、鳥居龍蔵の川平貝塚（川平獅子森の遺跡；図24）の調査から始まりました。鳥居は、沖縄本島や宮古を経由して八重山諸島に入り、石垣島で川平獅子森の遺跡を小発掘したのです。その時に出土した耳のついた土器を、「外耳（ソトミミ）土器」と呼称し、台湾以南の南の地域との関係を示唆しました（鳥居1905）。

その後、これらの土器は、弥生土器の系統であると訂正しましたが（鳥居1925）、晩年の著書『ある老学徒の手記』（鳥居1953）では、改めて「不可思議なることは、この土器の製作形式が、かの台湾東海岸花蓮港付近阿眉族（Ami）紅頭嶼ヤミ族（Yami）の現今製作土器と類似していることである。果して然らばこの遺跡は台湾島と連続すべきものである。なお今後の研究を要す」と述べ、元の考えに回帰しています。しかし、南方との関係を示唆した鳥居の主張は貴重なものではありませんが、この「ソトミミドキ」は、先に紹介した新里村期の遺物から、北からの文物である滑石製石鍋模倣の土器等が型式変化したものだということが分かってきました。また、時代も、鳥居が想定した弥生時代よりは、ずっと新しいものだということが明らかとなっています。

この時期の土器は、現在、中森式土器（鳩間島中森貝塚を標式とする）という型式名があります。さらに細分する研究も進められており、これらが、八重山諸島特有の土器文化であることも分かっています。

2) 陶磁器（図25）

また、外国産（主に中国）陶磁器については、沖縄本島や周辺諸地域とも比較検討しなければなりません。沖縄諸島グスク時代の集落から出土する遺物とほぼ同様で、青磁は蓮弁紋碗や雷文帯碗、無紋の外反口縁碗などのほか、白磁、染付、褐釉陶器等が出土します。

3) その他の遺物

その他の遺物としては、刀子、手斧状鉄製品、鉄鍋破片等の鉄製品の出土数が、新里村期に比して増加します。

西表島上村遺跡、石垣島ヤマバレー遺跡、仲筋貝塚等で簡易な鍛冶があったことを示す轆の羽口なども出土しています。「明実録」には、14世紀代に琉球が鉄釜等を欲している様子がうかがえ、大城慧は沖縄での鉄器流通について、グスク時代（12～16世紀）の後半以降に鉄器が広く使われ始めま



図24 国指定史跡川平貝塚遠景



図25 遺跡出土の中国産陶磁器

すが、限定された特定階層にとどまり、一般民衆の中に浸透していくのはさらに遅れると指摘しています(大城1997, 2007)。また、農具の鉄器化が遅れるとの指摘は重要です。

鉄、石製品だけでなく、ウシやイノシシなど八重山諸島では、比較的大型動物の骨を使った製品も見られます。骨製鏃様製品(骨製尖頭器・ヤス状製品・骨鏃等)やヘラ状製品等である。なお、近年、骨製鏃様製品を含む先島諸島出土の骨製品については、盛本勲(盛本2005)、久貝弥嗣(久貝2005)らによる集成・研究が進められています。

この時期からは、石またはガラス製小玉や勾玉も出土します。貝製品では、貝錘、貝刃、ヤコウガイ製貝匙等が、また、わずかながら、敲打器等の石器も出土しています。

4) 食糧残滓

貝類ではチョウセンサザエやマガキガイ、シャコガイ等、魚類では新里村期同様ブダイやハタ類などが見られるが、比較的大型の動物骨(イノシシ、ウシ)が多く見られるようになります。また、例は少ないですが、ウマやヤギも見られます。

飼育動物については、新里村期同様、ニワトリやウシが確認されています。慶来慶田城遺跡からのイエネコの出土について、同定を担当した金子浩昌は沖縄におけるネコの飼育はグスク期以降であり、日本本土とほぼ変わらないと報告しています。しかし、イヌについてはピロースク遺跡で埋葬されたイヌの骨が出土したのとは対比的に、慶来慶田城遺跡では解体痕を持つイヌの骨が出土しており、金子は沖縄では基本的にイヌを食べる風習はなかったはず、としてイヌを食べる風習を持つ別の文化と接触した可能性を示唆しています。

中森期は米や粟の栽培が安定化してくる時期であると考えられます。フルスト原遺跡、新里村西遺跡をはじめ、複数の遺跡で炭化米やイネのプラント・オパール(宇田津2005)の報告があり、稲作が定着していることがうかがえます。分析の結果、それらはジャポニカ種であることが指摘されています。これは、新里村西遺跡で検出された高倉跡や、遺跡が増える(人口が増加する)要因としても重要であると考えられます。

(2) 遺構

1) 石積み(屋敷囲い)

ピロースク遺跡や新里村西遺跡の調査などから、14世紀に石垣が積み始められることが分かっています。屋敷囲いの石垣には、a:新里村西遺跡や花城村跡遺跡、フルスト原遺跡(図26)等に見られる“細胞壁状”と表現されるいくつもの屋敷跡が連なった形態のものや、b:小浜島ウテスク山遺跡のように中心となる空間を取り囲むように石垣で囲うもの、c:黒島の宮里部落北方遺跡群(イヌムル、フキスク、ザンドウ、ウブスク)などに見られるひとつひとつが独立したものの、等があります(a~cは本稿における暫定的な分類で資料6に対応)。aは新里村西遺跡を発掘した金武正紀によって早くから八重山諸島の特徴的集落形態として指摘されたもので、石垣と石垣を結ぶ道路がなく、通用門で結ばれたタイプです。石垣の根石幅はフルスト原遺跡、新里村西遺跡、花城村跡遺跡等の調査により1.8m~2m幅で確認されており、その幅に比例するように花城村跡遺跡や波照間島マシュク村遺跡では2m以上の高さで石垣が現存しています。



図26 国指定史跡フルスト原遺跡の石垣

八重山諸島における石垣のある遺跡についても、以前は、沖縄本島及び周辺離島に見られるグスクの概念が当てはめられ、一様に考えられてきた時期があります。しかし、発掘調査が進むにつれ、出土する遺物や石垣の形態の差違が指摘され始めました。現在では集落論が優勢になっていますが、城郭遺跡であると位置づける研究者もいます。當眞嗣一は、『小浜島総合調査報告書』の中でウテスク山遺跡、ユンドゥレースクなどが、城郭遺跡に当たるとしています(當眞2004)。

これらの石積みの遺跡について、宮城弘樹ら(宮城ほか2012)は、研究報告書をまとめ、石積み遺跡についての地域差を指摘するとともに、その性格の位置づけを試みました。

1997年に国立歴史民俗博物館と石垣市教育委員会が、共催で開催した歴博フォーラムは、「再発

見「八重山の村」(国立歴史民俗博物館編1999)がテーマでした。当時、歴博の考古班代表であった小野正敏は、このシンポジウムに先立ち、八重山の中・近世の遺跡について現地調査を実施しました。その時の調査メンバーは、歴博の研究者だけではなく、沖縄県内の研究者も交え、考古学・民俗学を中心とした視点で行われました。なお、フルスト原遺跡、花城村跡遺跡に代表される、「道路がなく、それぞれが連結した石垣のある遺跡」は、上村遺跡などの数例をのぞいて、おおむね14世紀末～16世紀の範囲で生活層が途絶える傾向が見られる。近年、山本正昭により、八重山諸島についてもスク・集落に関する論考が見られます(山本2002ほか)。



図 27 竹富島の集落形態

2) 住居

住居に直接関する遺構としてはフルスト原遺跡で円形状平地住居跡が、ビロースク遺跡や新里村西遺跡等で方形の建物跡が検出されています。また、高床式の高倉跡と考えられるものも検出されており、農業生産の発達が指摘されています。金武正紀は新里村西遺跡の調査から、明治期に描かれた八重山の古地図(沖縄県立図書館所蔵)や現在の竹富集落でも確認できるひとつの屋敷に複数の建物が建つ傾向は(図27)、この時期からだと考えられています。

3) 井戸

これらの集落遺構に隣接して、井戸も見られます。これらの井戸はウリカー(降り井戸)が多いですが、近世以降も使われ続ける場合が多くみられます。石垣島平得のパイナーカー(パイナーカー遺跡)やアラスク村跡遺跡内の新城原井戸、竹富島の新里村東・西遺跡の中心に位置するハナクンガー(図28)等も幅を広げ階段を設けたり、周囲に石を積んだりしながら、形を変えていったものと思われます。



図 28 竹富島のハナクンガー

4) 墓制

墓制については、遺跡で確認されたのはすべて埋葬です。土壇墓や周囲を石で囲った石囲墓、板石墓等が見られます。石垣島四ヵ村では、成人骨は民俗方位の西側に頭を向けて埋葬される傾向があります。1例のみ石垣島石垣貝塚に石組墓と報告されたものがありますが(石垣市教育委員会1993)、墓の規模も他の例より大きく、かつ、焼骨を埋めており、スタンダードな墓とは言えません。今後、類例の報告を待って検討すべき事例です。

5) その他の遺構

他に円形の石組遺構や溝状遺構なども確認されています。

<参考・引用文献一覧>

- 石垣市教育委員会 1993『石垣貝塚—県道真栄里新川線街路改修工事に伴う緊急発掘調査報告書—』石垣市文化財調査報告書第17号 石垣市教育委員会
- 石垣市総務部市史編集課編 2008『石垣市史考古ビジュアル版』第5巻陶磁器から見た交流史 石垣市
- 石垣市総務部市史編集課編 2010『石垣市史考古ビジュアル版』第6巻八重山の民間交易隆盛期 中森期—中国陶磁器・人口の増加— 石垣市
- 宇田津徹朗 2005「石垣島における稲作の起源を追って—プラント・オパール分析法を用いた検討—」『石垣市史のひろば』第28号 石垣市総務部市史編集課
- 大城慧 1997「沖縄の鉄とその特質」『考古資料より見た沖縄の鉄器文化』 沖縄県立博物館
- 大城慧 2007「沖縄貝塚時代後期出土の鉄器について」『南島考古』第26号(多和田真淳先生生誕百年記念特集号) 沖縄考古学会
- 金武正紀 1999「再発見された八重山の古村落」『村が語る沖縄の歴史—「再発見・八重山の村」の記録—』 新人物往来社
- 金武正紀 2003「第2部先島の先史・歴(原)史時代 第1章～第5章」『沖縄県史』各論編第2巻 考古 沖縄県教育委員会
- 久貝弥嗣 2005「先島諸島出土の骨製品について」『紀要沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 久貝弥嗣・本村麻里衣 2013「2013年度友利元島遺跡発掘調査速報」『発掘調査が証す歴史津波の実態』沖縄防災環境学会シンポジウム in 青山学院大学 沖縄防災環境学会
- 国立歴史民俗博物館編 1999『村が語る沖縄の歴史—「再発見・八重山の村」の記録—』 新人物往来社
- 當眞嗣一 2004「小浜島のスク(グスク)」『小浜島総合調査報告書』 沖縄県立博物館
- 鳥居龍蔵 1905「八重山の石器時代の住民に就て」『太陽』第11巻第1号 東京博文堂(1996年『沖縄県史料』考古関係資料1に転載)
- 鳥居龍蔵 1925「八重山の遺跡に就て」『有史以前の日本』 磯部甲陽堂
- 鳥居龍蔵 1953「私と沖縄諸島」『ある老学徒の手記—考古学とともに六十年』 朝日新聞社(2003年復刻 ネット企画)
- 宮城弘樹・安斎英介・久貝弥嗣・島袋綾野 2012『先島諸島における先史時代の終焉とスク遺跡出現に関する研究—研究成果報告書—』第39回(平成22年度)三菱財団人文科学研究助成人文学—31 研究代表者:宮城弘樹
- 盛本勲 2005「宮古・八重山諸島のグスク時代出土の骨鏃様製品考」『紀要沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 山本正昭 2002「グスク時代の空間構成試論」『新視点 中世城郭研究論集』 新人物往来社